『鳳城聯句集』訓注稿（八）

楊昆鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿（本誌第四二号、令和元年九月）の続きとして、全三十作のうち、第二十七と第二十八の二点をここに掲載する。

【凡例】

・五言の句冒頭に通し番号を付した。
・漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
・訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。
・明らかな誤字もそのまま翻刻し、語注において説明を加える。
・注は最小に止め、故事出典を示し、一部熟語の用例を示す。

侵第十二　　慶長十七年十二月十一日

1 声一亀(テ)鶯　棘(スレ)口(ニ)　　声亀(1)んで鶯口に棘す

2 残一臘　待(ツ)二春一吟(ヲ一)　　残臘　春吟を待つ　　節

3 機　駿(ニメ)　毳　根(ックレ)道(ニ)　　機(2)駿にして毳道に根づく　　

4 平一居　絶(ースニ)浪一心(ヲ一)　　平(3)居　浪心を絶す　　雲

5 雪一(ノ)時　山　玉一立　　雪の時　山は玉立　　宮

6 巳一節　渚　杯一深　　巳(4)節　渚は杯深　　澗

7 荔(ハ)熟(ースノ)洪　閑一味　　荔は熟す　洪(5)の閑味　　御

8 叢(ハルノ)興　海　旧一箴　　叢は興る　海(6)の旧箴　　竹

9 鐘一鳴(テ)諳(ンズ)二遠一寺(ヲ一)　　鐘鳴きて遠寺を諳んず　　重

10 書(ー)　満(テ)　惜(ムニ)分一陰(ヲ一)　　書満ちて分(7)陰を惜しむ　　渓

（1）「亀」は皸にも通じ、皮膚の凍傷によるあかぎれをいう。

声との組み合わせは未見であるが、ここは寒さで鶯の声がかすん（翳）んでしまう喩えか。また「棘口」の古い使用例も未見。

（2）「機」は時機、ここで駿馬と喩えているのは、時機が逼迫することか。釈洪徳「臨機弁神駿、正要略玄黄」（次韻黄元明）は近い。また「毳」はここでは橇に通じ、道に根付いて動かないという。

（3）平常。阮籍「念我平居時、郁然思妖姫」（詠懐詩第五十一）など。「浪心」は不羈なる心。

（4）上巳。三月三日。清流に酒杯を浮かべ、詩歌を作る曲水の宴をいう。

（5）中国禅宗洪州宗。洪州は江西省にあり、荔枝と何らかの関連性があったか。

（6）中国の禅僧の百丈懐海、洪州宗創設者馬祖道一の法嗣である。「旧箴」というのは、百丈懐海が制定した「叢林清規」を指し、また「叢興」もそれに因む。

（7）僅かな光陰。ここでは満ちあふれる書物を読むべく、短い時間も大切にするという。劉克荘「年少分陰且惜取、老夫不覚已頭童」（和陳生投贈二首、其二）。

11 戟ハ折ル風簾ノ蝶　　戟(8)は折る　風簾の蝶　　勝

12 目ニ耕ス天ニ禄ノ蝉　　目耕す　天禄の蝉　　緒

13 菊　凋テ　星　欲スレ曙ント　　菊凋んで星曙けんと欲す　　雲

14 箬　落テ月　昇ルレ岑ニ　　箬落ちて月岑に昇る　　宮

15 窓ニ小ニメ幾ク余ニ景ソ　　窓小にして幾ばく余景ぞ　　竹

16 日ハ三　僅ニ苦ムレ霖ニ　　日(9)は三　僅かに霖に苦しむ　　御

17 託レ鵑ニ疑レ向カトレ蜀ニ　　鵑に託して蜀に向かふかと疑ふ　　竹

18 憑テレ鯉ニマ、侭レ通スレ潯ニ　　鯉(10)に憑りて　侭く潯に通ず　　勝

19 松ニ響テ訝ルニ潮ノ怒ルカト　　松響きて潮の怒るかと訝る　　渓

20 草ニ荒テ懶シ径ニ尋ヌルニ　　草荒れて径尋ぬるに懶し　　重

（8）翼。折翼は挫折に遭うこと、また陶侃「天門折翼」の故事から自らを戒める意味で使われる。

（9）長雨が降り続け、月に三日間しか晴れない。楊万里「両月春霖三日晴、久寒初暖稍秧青」（農家歎）、陸游「百年更把幾杯酒、一月元無三日晴」（家園小酌二首、其一）。ただし、その場合「僅かに」の使い方は不自然。

（10）元稹「憑仗鯉魚将遠信、雁回時節到揚州」など、鯉に手紙を届けてもらうという。「潯」は潯陽。

21 建ニ安ハ韓カ風ニ致　　建(11)安は韓が風致　　御

22 雲ニ夢ハ信ニ生ニ擒　　雲夢(12)は信の生擒　　澗

23 家ハ為レ盤レ遊忘　家は遊りを盤しむが為に忘す(13)　雲
24 霧ハ依レ受レ瘴侵ス　霧は瘴を受くるに依りて侵す　御
25 借レ涼ヲ雖ニ廃一扇ト　涼を借りて廃扇と雖も　澗
26 坐レ冷ニ奈シ単一衾ヲ　冷に坐りて単衾を奈せん　竹
27 令レ色ヲ双ツ巣ニ翡　色を令くす　巣に双ぶ翡(14)　御
28 斂ム翎ヲ択レ栖ヲ禽　翎を斂む　栖を択ぶ禽　渓
29 緑一濃ニ添ニ牧カ恨ヲ一　緑濃やかにして牧が恨みを添ふ(15)　勝
30 清一独リ愍ム原カ沈ヲ一　清独り原が沈むを愍れむ　竹

（11）漢末から魏にかけて曹操父子と建安七子の詩文に見られる風格。古文復興運動を提唱した韓愈の詩文に見られるという。前句の荒廃した情景を建安風骨の衰退と捉えた。

（12）韓信が雲夢沢で劉邦に捕らえられた。『史記・淮陰侯列伝』「漢六年、人有上書告楚王信反。高帝以陳平計、天子巡狩会諸侯、南方有雲夢。発使告諸侯、会陳、吾将遊雲夢。実欲襲信、信弗知。（中略）上令武士縛信載後車」。

（13）遊楽。張衡「極盤遊之至楽、雖日夕而忘劬」（帰田賦）。

（14）番いになって巣くう翡翠という鳥。李白「中巣双翡翠、上宿紫鴛鴦」（古意）。

31 横レ水ニ梅龍一種　水に横たふ(16)　梅の龍種　御
32 帰レ空ニ蔗ノ鶴一林　空に帰す　蔗の鶴林(17)　雲
33 个ノ僧雲ニ見ル暁ナツカシンセ　个の僧　雲に暁しんぜらる　重
34 隻一妾夜争一禁ン　隻妾　夜は争でか禁へん(18)　宮
35 艶一簡尽ス言ノ美ナルヲ一　艶簡　言の美なるを尽くす　澗
36 粧一匳漸ク孔ハタヲヘイナルヲ一壬一　粧匳　孔壬いなるを漸づく(19)　勝
37 煙一間容レ髪ヲ柳　煙間　髪を容るるは柳　竹
38 榻一下嗜ム眠ヲ蔵一　榻下　眠を嗜む蔵(20)　重
39 蚕一晩メ懶シ村一婦一　蚕晩くして村婦懶し　雲
40 鶏一寒メ効フ野一暗ニ一　鶏寒くして野暗に効ふ(21)　澗

（15）杜牧のことか。「緑濃」は春が深まる意味で、宋末元初の詩人俞徳隣には「多病楽天悲老近、三生杜牧恨春深」（泊閻橋有懐）という詩句があり、この句と趣旨を同じくするが、受容は定かではない。

（16）林逋「疎影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏」（山園小梅）。

横たわる梅の枝は龍のごとしと范成大『梅譜』にある。

(17) 「鶴林」は仏寺の意、ここでは鶴の居る蔗林か。鶴は前句林逋「妻梅子鶴」からの連想。

(18) どうして堪え得るか、いや出来ない。白居易「敢辞課拙酬高韻、一勺争禁万頃陂」(酬裴相公題興化小池見招長句)。

(19) 堯の時の奸佞。「ハタ」という送り仮名は不明。『尚書』に「何畏乎巧言令色孔壬」とある。黄庭堅「厭看孔壬面、醜石反成妍」(玉芝園)。

(20) 草の名、やまあい。『爾雅・釈草』に「寒漿」とあり、一方『聚分韻略』に「蔵 蒋ー」とある。ここで擬人化されているが、「蔵」を名前に含む人物は孔子の弟子公西蔵を除き、他はほとんど知られない。押韻するためか。

(21) 熟語としての使用例は未見。ただし蘇軾「市人争誇闘巧智、野人喑唖遭欺謾」(和子由蠶市)に基づく造語の可能性はある。蘇軾詩題の「蠶」は「蚕」の異体字。蚕を詠む前句からの連想か、興味深い。

41 湯ー婆 何ッ足レ嫁ースルニ　湯婆 何ぞ嫁するに足らん　渓

42 社ー友 毎ニ欣フレ臨スルヲ　社友 毎に臨するを欣ぶ　雲

43 新ー洛 移ス兜ー率ヲ　新洛(22) 兜率を移す　澗

44 有ー莘 現ス世ー音ヲ　有莘(23) 世音を現す　御

45 波 狂ーメ船 追レ北ルヲ　波狂して船は北(に)ぐるを追ふ　御

46 路ー杳ニメ轍 司ー南　路杳にして轍は司(24)南す　澗

47 慕ハ乞レ越ヲ坡ーヲ鷓　越を(25)乞う坡を慕ふは鷓　雲

48 全スルニ亡ハスルレ楚ヲ季ーヲ鴦　楚を亡する季を(26)全うするは鴦　重

49 倦 樵 傾ク雨ー笠ヲ　倦樵 雨笠を傾く　宮

50 深ー隠 翫フ泉ー琴ヲ　深隠 泉琴を翫ぶ　竹

(22) 「新洛」は新しい都か、後考を待つ。兜率天を移したかと思わせる壮麗さをいう。

(23) 古代の国。周文王の妻の有莘国の出身で、武王など十人兄弟を産んだ。「世音」とは観世音菩薩、賢母の喩えか。

(24) 南を示す計器、また司南車のこと。劉敞「時無司南駕、自比連城珍」(以石為玉)。

(25) 蘇軾が越州への赴任を希望した。「我頃三章乞越州、欲尋万壑看交流」(次韻滕大夫三首、雪浪石、其二)。「鷓」は南方の鳥。

(26) 漢高祖劉邦の字は季、項羽を滅ぼした。「鴦」は戴勝鳥。

51 鸝ー曲 愕カスヲ牙ーヲ曠ー　鸝曲 牙曠(27)を愕かす　重

52 烏ー情 感センムニ閔ーヲ参ー　烏情 閔参(28)を感ぜしむ　雲

53笑微知観一　笑微にして観一を知る　澗
54軽畢合禁十　軽畢へて禁十を合ふ　竹
55羯鼓花塗毒　羯鼓(30)は花の塗毒　勝
56伽藍樹布金　伽藍　樹の布金　澗
57復圭盈地雹　圭を復(31)さんとす　地に盈つる雹　竹
58漲硯倒溟涔　硯に漲る　溟を倒しまにする涔(32)　渓
59谷是宋工部　谷は是れ　宋の工部　重
60寂其仰祖欽　寂(33)は其の仰の祖欽　澗

(27) 伯牙と師曠。伯牙は琴を善くし、師曠は善く音を弁ずという。白居易「願求牙曠正華音、不令夷夏相交侵」（新楽府法曲美列聖正華声也）。この二人さえも驚くほど、鶯の鳴き声が美しいという。

(28) 閔子騫と曾参。ともに孔子の弟子で、孝行で知られる。『二十四孝』に閔損は「蘆衣順母」、曾参は「嚙指痛心」の主人公として登場する。烏情とは烏が老いた親鳥に餌を運び与え、いわゆる反哺をすること。

(29) 不明、後考を待つ。

(30) 羯鼓の音で柳や杏が芽生え花を咲かせた故事。『景徳伝灯録・巻十六』「吾教意猶如塗毒鼓、撃一声遠近聞者皆喪」（鄂州巌頭全豁禅師）。

(31) 復職の意。圭は美玉で作られるため、ここでは雹の比喩。

(32) 「涔」は雨による溜まり水。ここで硯に墨汁がいっぱいに漲ることは、海をひっくり返すのように大きな水溜りができたと同じだ、という意か。

(33) 唐代禅僧の仰山慧寂。南宋の禅僧雪岩祖欽は仰山禅寺に住した。

61柿霜林七絶　柿は霜林の七絶　御
62茅巷杏孤斟　茅(34)は巷杏の孤斟　澗
63晤語吾無憾　晤語(35)　吾に憾無し　重
64処羞神所歆　処羞(36)　神の歆くる所　澗
65亀趺碑幾歳　亀趺(37)　碑は幾歳ぞ　雲
66駒隙古猶今　駒隙　古猶今のごとし　竹
67空在死名墨　空しく在り　名に死する墨(38)　勝
68罕逢愈疾琳　罕に逢ふ　疾を愈す琳(39)　雲

69 窮ー儒　文　引レ睡ヲ　　窮儒　文は睡を引く　　宮

70 登ー女　席　纏レ嬈ニ　　登女(40)　席は嬈に纏ふ　　澗

(34) 茅柴酒、粗末な酒。蘇軾「幾思圧茅柴、禁網日夜急」（岐亭）。「巷杏」は杜牧「借問酒家何処有、牧童遙指杏花村」（清明）から、杏が咲く村里の酒屋を意味する。五山に用例が多い。

(35) 語り合う。『詩経・東門之池』「彼美淑姬、可与晤語」。

(36) 一応「処」とするが、字形に疑問が残る。「処羞」は意を成さず、熟語の用例も見られない。他の可能性として虔・庶・薦の三つが挙げられる。虔は字形が最も近いが、虔羞の使用例はない。庶と薦とは字形こそやや距離があるものの、庶羞は多くの美味、薦羞は薦められた美味。王十朋「茲地有神宇、人人来薦羞」（十八坊詩、介福）。「神韻」は、神が楽しむこと。「神歆享、咸悦康」（晋鼓吹曲二十二首、其十三）。

(37) 石碑を背負う亀の形の台座。蘇軾「亀趺入座螭隠壁、空斎昼静聞登登」（孫莘老求墨妙亭詩）。

(38) 「墨」は人名。義として周粟を食さず餓死した墨胎允伯夷、墨胎智叔斉の兄弟を指すか。

(39) 魏の陳琳、曹操配下の書記官。『三国志・陳琳伝』「琳作諸書及檄、草成呈太祖。太祖先苦頭風、是日疾発、臥読琳所作、翕然而起曰、此癒我病。数加厚賜」。

(40) 摩登伽女。鉢吉帝、摩登伽種の姪女。幻術を以て阿難を惑わせた（仏学大辞典）。

71 愛ー愛　鴛　相ー並ブ　　愛愛　鴛は相並ぶ　　雲

72 暗ー暗　蟀　似ー紆ニ　　暗暗(41)　蟀は紆に似たり　　御

73 鬢ー茎　黄　雑レ白ヲ　　鬢茎　黄は白を雑じゆ　　渓

74 舌ー本　皙シラ、　謳レ黔クラ、ヲ　　舌本(42)　皙らかは黔らかを謳ふ　　勝

75 壌ハ酔ー農ノ珊ー枕　　壌は酔農の珊枕　　雲

76 霞ハ屡ー顔ノ玳ー簪　　霞は屡顔(43)の玳簪　　澗

77 詩ー肩　何　耐ソンレ重キニ　　詩肩(44)　何ぞ重きに耐えん　　御

78 燭ー涙　孰カ　労センレ淋クニ　　燭涙　孰れか淋しくに(きか)労せん　　竹

79 挽ハニ石ー八ヲ弓ー臥　　石八(45)を挽くは弓臥　　勝

80 愧ハニ金ー両ヲ臼ー任　　金両を愧ずるは臼(46)任　　澗

(41) 口のきけない様。蟋蟀を形容する例は未見。また万里集九の『会海対類畳字』にも未収録。

(42) 舌。黄庭堅「一甌資舌本、吾欲問三車」（寄新茶与南禅師）。前句の黄と白という字からの連想か。

(43) 山。蘇軾「我行無遅速、摂衣歩屡顔」（峡山寺）。「霞」は山に飾る玳瑁の簪、山を彩ること。ここの霞はかすみ

ではなく、朝焼け夕焼けか。

(44) 詩人の痩せた肩。前句の山からの連想。白玉蟾「山似詩肩聳、江如酒量寛」(晩吟)。類似の表現として「吟肩」がある。

(45) 黄庭堅「挽弓石八不好武、読書臥看三峰雲」(次韻答曹子方雑言)。

(46) 黄庭堅「自守藩籬小、猶能井臼任」(次韻徳孺感興二首、其一)。

81 苔ー氈ハ予ー屋カノ什	苔氈は予が屋の什	竹
82 棕ー払ハ祖ー門ノ鐔	棕払は祖門の鐔	雲
83 甘ニハ鉄ー飯ヲ禅ー悦	鉄飯(47)を甘きとするは禅悦	渓
84 拈ースルハ香ー材ヲ賀ー忱	香材を拈ずるは賀忱(48)	御
85 高クシテ狎ルル鴻ー志ノ雀	高く狎る　鴻志の雀	竹
86 珠ニ絶シタリ電ー行ク駸ムマ	珠に絶したり(49)電の如くに行く駸	重
87 翹ルレニ足ヲ不レハ前マ履	足を翹ぐるに前まざるは履	澗
88 療メレ膏ヲ難レハ下シ針	膏を療して下し難きは針(50)	勝
89 培ハニ仙ー苗ニ薬ー畝	仙苗に培ふは薬畝	雲
90 添テニ稚ー竹ヲ蕭ー森	稚竹を添ひて蕭森(51)たり	御

(47) 鉄製の鉢から。前句に続き、禅僧の日常を詠む。白居易「云昔迦葉仏、此地坐涅槃。至今鉄鉢在、当底手跡穿」(遊悟真寺詩)。

(48) 祝賀の誠意。漢詩文に用例が稀である。

(49) 「珠絶」は熟語の用例が未見。「珠」は珠履の略か、珠で飾られた履、またそれを穿いた門客。ここは門客が絶えたこと。李益「珠履久行絶、玉房重未開」(賦応門照緑苔)。

(50) 膏肓。前句に詠まれた、足を上げても進まない様子を重病と捉えた。

(51) 草木の生い茂るさま。張協「渓谿無人跡、荒楚郁蕭森」(文選「雑詩十九首、其九」)。

91 鳥ハ狎ルルニ可レ人ニ卓ニ	鳥は人に可(52)なる卓に狎る	竹
92 鳩ハ中ニ殺レス我ヲ琛ニ	鳩は我を殺す琛(53)に中る	雲
93 拾テレ枯ーヲ童 煮レル茗ヲ	枯を拾ひて童茗を煮る	宮
94 約メレ寂ーニ旅 聴レク礁ヲ	寂に約して旅礁を聴く	重
95 嘗テレ険ヲ鞋 穿ー結	険を嘗(54)めて鞋は穿結	渓
96 祭テレ廟ーニ簠 腥ー燔	廟に祭りて簠は腥(55)燔	御

97 窄レ天ヲ堯ノ露ー甕　天を窄みて堯の露甕(56)　勝

98 記ス閣ニ勃カ江ー襟　閣に記す　勃が江襟　緒

99 恩ー沢　勝レ瀛ノ大ナルニ　恩沢　瀛の大なるに勝れり　澗

100 治ー邦　致ス代ノ諶トヲ　治邦　代の諶を致す(57)　御

（52）意に適う。宋方岳「竹君自可人、清影飛度牆」（八月十四夜対月）。

（53）「琛」は珍宝、句意にかかわる典拠は不明。押韻するための用字か。

（54）険阻を経験すること。「鞋」との取り合わせは、漢詩には珍しいが、和漢聯句には見られる。「潮激舟寧泊／路岨鞋備嘗」（元和八年三月十五日和漢百韻）など。「穿結」は破れて結ばれること。陶淵明「短褐穿結、瓢簞屢空」（五柳先生伝）。

（55）熟語としての用例は未見。「燖」は燭と同じ、熱湯で煮る調理法。「三献燖、一献熟」（礼記・郊犠牲）。

（56）熟語としての用例は未見。露の甕。「堯露」は例えば武元衡「漢代衣冠盛、堯年雨露多」（送馮諫議赴河北宣慰）のように、治世の恵みをいう。

（57）「諶」はまこと。『詩経・蕩之什』「天生烝民、其命匪諶」。

覃第十三　慶長十七年閏十月二十九日

1 雪ー内ノ牡ー丹ー院　雪内の牡丹(1)院

2 添レ紅ヲ閏ノ十ー三　紅を添ひて閏の十三(2)

3 炉ー中ノ螺ー甲ー炷　炉中の螺甲(3)炷

4 裊レ縷ヲ雨　同ー参　縷を裊して雨は同参

5 蓬ハ入ル安ー眠ノ枕ニ　蓬は安眠の枕に入る

6 楚ハ愁フ性ー冷ノ柑ヲ　楚は性冷の柑を愁ふ　御

7 氷レ衾ヲ霜ー夜　懶シ　衾を氷らして霜夜懶し　雲

8 照メ鏡ヲ暮ー年　慚ツ　鏡を照らして暮年を慚づ　召

9 彭ー八　山　何ッ改メン　彭八(4)　山は何ぞ改めん　璘

10 孔ー千　道　以ー談ス　孔千　道は以て談ず　節

（1）秋冬に咲く牡丹の品種か。策彦周良に「雪内牡丹」と題して「半恨東風半北風、層層襯雪牡丹紅」と詠む。

（2）閏月があると、一年は十三ヶ月になるので「閏十三」という。宜竹「賦十三紅牡丹」詩に「子細数年尤感情、今年有閏十三生。牡丹白髪若相似、一月猶添雪成茎」とある。

（3）香料か。黄庭堅「石蜜化螺甲、榠楂煮水沈」（賈天錫恵宝薫乞詩多以兵衛森画戟燕寝凝清香十字作詩報之、其三）。

（4）彭祖が八百年も長生きしたことをいう。蘇軾「八百要有終、彭祖非永年」（問淵明）。

11 徳一輝　麟　在レ炭　　徳輝　麟(5)は炭に在り　　竹

12 妖一艶　翡　成ス簪ヲ　　妖艶　翡は簪を成す　　宮

13 棠ハ学二酔一妃ノ媚ヲ一　　棠は酔妃の媚たるを学ぶ　　緒

14 荔ハ余ス二老一素ノ甘ヲ一　　荔は老素(6)の甘きを余す　　澗

15 世一交　雲　易レ変シ　　世交　雲は変じ易し　　良

16 閨一怨　暁　難シレ堪ヘ　　閨怨　暁は堪へ難し　　賡

17 寄スルハ二数一行ノ啼ヲ一雁　　数行の啼を寄するは雁　　御

18 施ハ二三一起ノ巧ミヲ一蚕　　三起(7)の巧みを施すは蚕　　雲

19 簾一波　盆ス手ヲ竹　　簾波(8)　手を盆す竹　　召

20 輪一囷　冠タルレ宗ニ枏　　輪囷(9)　宗に冠たる枏　　璘

（5）炭を獣の形に作り酒を温めたという羊琇の故事（晋書・外戚伝）に、治世に麒麟が現れると取り合わせたか。蘇軾「白灰如積雪、中有紅麒麟」（贈月長老）。蘇過「獣炭麒麟紅、銀瓶黄封揭」（小雪）など。

（6）熟語の用例は未見。前句の「酔妃」と対偶を作るため、人名と思われるが不明、後考を待つ。

（7）蚕が孵化することを「起」といい、「三起」は年に三度孵化すること。陸游「壟麦行可穫、呉蚕亦三起」（甲子日晴）。

（8）簾の揺れる動きが波打つように見えること。李商隠「玉佩呵光銅照香、簾波日暮衝斜面」（燒香曲）。また「盆手」は盆水の中に手を入れて繭の糸緒を探すこと。范成大「桑姑盆手交相賀、綿繭無多糸繭多」（四時田園雑興六十首、其二十八）。

（9）大きい様。韓愈「窮途致感激、肝胆還輪囷」（贈別元十八協律六首、第四）。宋詩に多用される。

21 残一巻　追ヒ二西一月ヲ一　　残巻　西月を追ふ　　節

22 扁一舟　遶ルル二北一潭ヲ一　　扁舟　北潭(10)を遶る　　竹

23 重レ湖ヲ軽スルレ越ヲ一　蠡　　湖を重くして越を軽くする蠡　　宮

24 寿スレ日ヲ化一胡ノ聃一　　日を寿す　化胡(11)の聃　　良

25 松ニ有リ二猶一龍ノ瑞一　　松に猶龍(12)の瑞有り　　賡

26 蔗ハ禁ズ浮ー蟻ノ酣ヲ　蔗は浮蟻の酣を禁ず　節

27 悪ニ修ー羅ノ猛ーヲ妹　修羅(13)の猛を悪む妹　澗

28 呈ニ妙ー徳ノ祥ヲ一男　妙徳の祥を呈する男　雲

29 峰ハ按ニ吐ク虹ヲ剣ヲ一　峰は虹(14)を吐く剣を按ず　竹

30 煙ハ盈ツ沈ー水ノ籃ニ　煙は沈水(15)の籃に盈つ　御

（10）王勃「竹晦南汀色、荷翻北潭影」（山亭夜宴）、蘇轍「羨君不出心自如、北潭秋水多芙蕖」（寄孫朴）。

（11）老子が函谷関を出て西域を遊歴し教化したことをいう。偽経とされる『老子化胡経』がある。蘇軾「老聃西入胡、孔子東帰魯」（癸未生日）。

（12）老子またその道の深奥をいう。『史記・老子韓非列伝』「吾今日見老子、其猶龍邪」。唐李中「漆園化蝶名空在、柱史猶龍去不帰」（経古観有感）。

（13）阿修羅、戦う神。「妹」との関連は不明。

（14）蘇軾「知君不向窮愁老、尚有清詩気吐虹」（次韻張琬）など、気概が高邁なさまをいう。峰が剣を按ずとは不明。前句を承けて、「峰」は人名か。例えば雪峰義存。但し事跡については後考を待つ。

（15）沈水香、沈香。黄庭堅「百煉香螺沈水、宝薫近出江南」（有恵江南帳中香者戯答六言、其二）。籃との取り合わせは不明。

31 焉ソ瘦サン風ー外ノ麝　焉んぞ瘦さん　風外の麝　節

32 敢テ殿ルー路ー難ノ驂　敢えて殿る　路難の驂(むま)　澗

33 履レテ信ヲ歩ー何ゾ失　信を履(16)きて歩は何ぞ失ふ　御

34 鍾レテ情ヲ思ヒ愈ーク覃　情を鍾めて思ひ愈(17)いよ覃(ふか)し　召

35 氈ー車　昭ー載レス恨ヲ　氈車　昭は恨(18)を載す　雲

36 棊ー局　李ー多シレ憨ー　棊局　李は憨(19)多し　御

37 詩ハ淬テ詞ー鋒ヲ一戦フ　詩は詞鋒を淬ぎて戦ふ　宮

38 勝ハ携テ吟ニ杖ヲ一探ル　勝は吟杖を携はりて探る　賡

39 隣ムー鴎ヲ雖レ置トー散ニ　鴎を隣(海カ)む　散(20)に置くと雖も　良

40 塵ニメ蝶ヲ耐タリレ聴ニ雛ニ　蝶を塵にして雛(21)に聴くに耐えたり　雲

（16）陶淵明「夫履信思順、生人之善行。抱朴守静、君子之篤素」（感士不遇賦並序）。皎然「後輩驚失歩、前修敢争衡」（読張曲江集）のように、躊躇うことを「失歩」という。ここは信用を堅く守る以上、躊躇うことはあるまいという。

（17）「覃」は深い。黄庭堅「歳晩草玄経、覃思写天維」（次韻

奉送公定）。

（18）王昭君。王安石「明妃初嫁与胡児、氈車百両皆胡姫」（明妃曲）。

（19）李憨子。欧陽脩「太宗時有待詔賈玄、以棋供奉、号為国手、爾来数十年未有継者。近時有李憨子者、頗為人所称、云挙世無敵手。然其人状貌昏濁、垢穢不可近」（文忠集「帰田録」）。

（20）「置散」とは閑職を任じられること。韓愈「動而得謗、名亦随之。投閑置散、乃分之宜」（古文真宝「進学解」）。「隣鴎」は「鴎と隣す」とも読めるが、「憐む」の誤写か。

（21）鶉。蘇軾「振翮遊霄漢、無心顧雀鷁」（入峡）、「鷁」は「雛」の異体字。

41 磊-苴　梨　僧-様　　磊苴[22]　梨は僧様　　召

42 橡-樟　芋-跋-曇　　橡樟　芋跋曇[23]　　澗

43 礼-園　成レ趣ヲ少ナリ　　礼園[24]　趣を成すこと少なり　　御

44 隠-戸　トレ閑ヲ弇フ　　隠戸　閑をトして弇ふ（おほ）　　良

45 友ニ破-天-公ヲ-軾ヲ　　破天公[25]を友とするは軾　　雲

46 乗ニ長-齢-傳ニ-耽ニ　　長齢傳に乗ずるは耽[26]　　節

47 仙　棲　桃　面レ岸ヲ　　仙棲　桃は岸を面む[27]　　竹

48 梵-宇　蘇　埋レ龕ヲ　　梵宇　蘇は龕を埋む　　賡

49 講-後　鐘-声　唖ス　　講後　鐘声は唖す　　宮

50 粧-新ニ玉-髪　鬱タリ　　粧新にして玉髪は鬱たり　　節

（22）粗末でだらしないさま。冬第二27に既出。

（23）「芋跋曇」は不明。「橡樟」は豫樟に同じか、国家を支える人材。

（24）礼を修める場所。司馬相如「悲伐檀、楽楽胥。修容乎礼園、翺翔乎書圃」（文選「上林賦」）。

（25）海南の姜唐佐が蘇軾に教わり、「蒼海何嘗断地脈、白袍端合破天荒」（送姜唐佐）と詩を送られた。

（26）仙人蘇耽のことか。

（27）さしはさむ。『史記・司馬相如列伝』「赤瑕駁犖、雑面其間」とあるが、ここでは挟むの意。

51 妾ハ栽フニ相-思-草ヲ一　　妾は相思草を栽ふ　　御

52 母ハ苦ムニ羯-羅-藍ニ一　　母は羯羅藍[28]に苦しむ　　澗

53 生ハ毓スル字コヲモシツルミスル一　微　鳥　　生は毓す[29]　字微する鳥　　良

54 介ハ労ス曝シ戯ル蚶　　介は労す[30]　曝し戯る蚶　　雲

55心一珠　寧レ仮レ琢ヲ　心珠(31)　寧ろ琢を仮らんや　節

56雅一席　好知レ妘シルニタノシミヲ　雅席好し　妘しみを知る　御

57楓ハ有ニ花ノ天一下ヲ　楓は花の天下を有つ　賡

58棉一ハ伝ニ樵ノ嶺一南ニ　棉は(32)樵の嶺南に伝ふ　澗

59涛一春キテ賜ス泛一宅ヲ　涛春(33)きて泛宅を賜す　雲

60霧一簇テ滴ツ遙一嵐ヲ　霧簇りて遙嵐を滴つ　召

（28）父母が交合し、受精すること。

（29）「字」は子を育てること、「微」は交尾すること。ふりがな「コヲオモヒシ」と「ツルミスル」はその意味を和らげた読み。『史記・五帝本紀』「日中、星鳥、以殷中春。其民析、鳥獸字微」。また「毓」は育に同じ。

（30）黄庭堅「土弊禾黍悪、水煩鱗介労」（送劉士彦赴福建転運判官）。

（31）仏語。衆生が本来持つ明浄な心性。梁簡文帝「心珠可瑩、智流方普、永変身田、長無沙鹵」（芸文類聚・内典「釈迦文仏像銘」）。

（32）木綿。前句の楓から赤い花を咲かせる高木を連想した。『太平御覧』「広州記曰、枝似桐枝、葉似胡桃而稍大。出交廣二州」、「廣志曰、木綿樹赤華、為房甚繁」。『塵添壒嚢鈔』「木綿事」に「唐木綿云木アリ」とも見える。

（33）舟を家宅とすること。蘇軾「清遠聊為泛宅行、一夢分明堕郷井」（清遠舟中寄耘老）。涛春は、韓愈「遂凌大江極東陬、洪涛春天禹欠幽」（劉生詩）など、荒波が打つこと。

61林罅テ子一　蜺鹿　林罅きて子(34)蜺鹿　御

62蔵一ニハ収ム多一貝ノ蟬　蔵には収む　多(35)貝の蟬　澗

63伎一ハ閑ナリ辞レ蘖ヲ一　伎は閑なり　蘖を(36)辞する済　雲

64力ハ竭スル念レ観ヲ一鐔　力は竭す　観を念ずる鐔　良

65糸ハ寸　既ニ童ニスル柳　糸は寸　既に童ろにする柳　節

66堦　高メ称フレ意ニ薄コヒ　堦は高くして意に称ふ薄　御

67礎ハ従ニ呉一ノ破レテ一漢　礎は呉の破れてより漢　竹

68酒ハ易ルニ魯一ノ醨ニ一邯　酒は魯の醨に易る邯(37)　澗

69白一圍　綴レ斑ヲ鷺　白圍(38)　斑を綴る鷺　雲

70電一行　汗一血ノ驔ムマ　電行　汗血の驔(むま)　賡

（34）首を高く伸ばす様子。『文選・魯霊光殿賦』「白鹿子蜺於

構櫨、蟠螭宛転而承楣」。

(35) 二文字目にある平声の「収」と重ならないよう、根多を「多根」と調整したか。根多は先第一50に既出。

(36) 臨済慧照義玄が「三度発問、三度被打」（臨済録）のため、師黄蘗希運を辞した故事。「伎」は伎倆。

(37)『荘子・胠篋篇』「唇竭則歯寒、魯酒薄而邯鄲圍」。魯酒の故事は、歌第五40に既出。

(38)「圍」は前句からの連想。「白圍」の用例は未見、囲碁のことか。また「白登圍」の略か。すなわち漢高祖が白登で匈奴の兵三十余万に包囲された故事。

71	旅朝馳暮止	旅は朝馳暮止[39]	御
72	泓水滴星涵	泓は水滴星涵	節
73	林剪梅灯話	林は梅灯を剪りて話る	召
74	桓登芸閣諳	桓は芸閣に登りて諳ず[40]	宮
75	何言渓振舌	何をか言ひて渓は舌を振ふ[41]	竹
76	幾興景堪貪	幾ばくの興ぞ景は貪るに堪えたる	節
77	杏巷送春陋	杏巷　春を送ること陋し	賡
78	箬村終日酖	箬村[42]　終日酖しむ	御
79	涼揺陶起臥	涼揺ぎて陶は臥を起こす	節
80	沢吟屈懐湛	沢吟ふて屈は湛らかなるを懐ふ	澗

(39) 前句の「汗血」という駿馬から、屈原「朝馳余馬兮江皐、夕済兮西澨」（九歌・湘夫人）を連想したか。

(40) 芸台とも、蔵書の建物。前句の「林」が林逋を指すのに対して、「桓」は後漢桓栄のこと。

(41) 廣長舌、仏の舌。蘇軾「渓声便是廣長舌、山色豈非清浄身」（贈東林総長老）。支第四97に既出。

(42)「箬村」は下箬のこと、下若とも。『太平御覧』「輿地志曰、南岸曰上若、北岸曰下若、乃村名也。村人取若下水以釀酒、醇美勝于雲陽」（巻六十五、若下水）。

81	沙為湘澄筭	沙は湘の澄むるが為に筭ふ[43]	雲
82	暑秦苛婪	暑は秦苛と婪る	良
83	就荒狼睡塚	荒に就きて狼は塚に睡る	御
84	帯暖雀喧簷	暖を帯びて雀は簷に喧し	竹
85	民稲土摩詰	民は稲土の摩詰	雲
86	翁松原運庵	翁は松原の運庵[44]	澗

87怒ー潮　船　皷レ翼ヲ　怒潮　船は翼を皷す　良

88深ー閣　鑑　梳ルレ毳ヲ　深閣　鑑は毳を梳る　竹

89吐テ哺ヲ口ニスルレ堯ヲ且ー　哺[45]を吐きて堯を口にする且　御

90躓ツクレ文ニ夢ミルレ郭ヲ淹ー　文に躓く　郭を夢みる淹[46]　澗

（43）数の多いこと。『太平御覧』「魯連子曰、朝露之蒲、工女不能治。淄澠之沙、計児不能数」（巻七十四）。

（44）運庵普巌。「宋湖州道場山運庵巌禅師、嗣法於松源嶽禅師、授之於虚堂愚禅師」（仏学大事典）。

（45）周公旦が人材を大事にする故事。『史記・魯周公世家』「然我一沐三捉髪、一飯三吐哺、起以待士」。

（46）江淹が夢で筆を贈られた故事。『太平廣記』「宣城太守済陽江淹少時、嘗夢人授以五色筆、故文彩俊発。後夢一丈夫、自称郭景純、謂淹曰、前借卿筆、可以見還。探懐得五色筆、与之。自爾淹文章躓矣」（夢・梁江淹）。

91池ー蓮ハ誰ノ色ー筆ソ　池蓮は誰の色筆ぞ　良

92爛ー葛ハ祖ノ華ー緘　爛葛は祖の華緘[47]　雲

93禅ハ勝シリ八ー珍ノ味ニ一　禅は八珍の味に勝れり　宮

94矩ハ匡ス丈ー室ノ函ヲ一　矩は丈室の函を匡す　賡

95魚ハ抛ツ量ルレ海ヲ尺ヲ一　魚[48]は海を量る尺を抛つ　召

96梟ハ覃ム貯ルレ家ニ甑ヲ　梟[49]は家に貯まる甑を覃む　澗

97流ー涸テ石　猶ー醜シ　流涸れて石[50]猶醜し　竹

98叢ー繁メ露　半ー含ム　叢繁くして露半ば含む　御

99祝ー釐　嵩　万ー歳　祝釐　嵩[51]は万歳　節

100共ニ使メ国ニレ恩ヲ担ハ一　共に国恩をして担はしむ　雲

（47）手紙の美称。『太平廣記』「発華緘而思飛、諷麗句而目断」（雑伝記八）。

（48）白玉蟾詩「贈画魚者」に「状如抛尺量波練、復似穿梭擲水紋」と詠むのを踏まえているか。

（49）梟盧、古代遊戯用語。前句の字「抛」からの連想か。李賀「何須問牛馬、抛擲任梟盧」（示弟）。

（50）漢詩用例として欧陽脩「石醜駭渓怪、天奇瞰竜湫湫」（懐嵩楼晩飲示無党無逸）など。

（51）武帝が嵩山に登り、吏卒が万歳三唱を聞こえたという（漢書・武帝本紀）。尤第十一5に既出。

（よう　こんほう・武蔵野大学准教授）